

An Introduction to Mobile-Research Method**モバイルリサーチ 「こもろ・日盛俳句祭」のドキュメンテーション**

担当：加藤文俊（かとうふみとし）

メール：fk@sfc.keio.ac.jp

【概要】

ケータイは、わたしたちの日常生活のリズムを変え、より重層的なコミュニケーションを可能にするメディアとして理解することができます。最近では、とくにマーケティングの分野で生活者調査にケータイ（カメラ付きケータイ）を活用する事例が増え、“モバイルリサーチ”として認知されつつあります。

つねにわたしたちの手の中にあるケータイを、“通信機能を内蔵したセンサーの集合体”として考えるとき、「社会調査」という観点、とりわけ、生活誌・生活史やライフヒストリー・アプローチとの関連で考えることはきわめて興味ぶかいと思われれます。たとえば、ケータイのカメラによって切り取られる日常の「ひとコマ」は、ひとつの「生活記録」として理解することができます。そして、日々、さまざまな場面で写され蓄積されてゆく写真を、時間的に、あるいは空間的に分類・配列することによって、個人の行動軌跡や人びとが集った「現場」をある程度再現することができます。

「生活記録」の収集において欠くことができないのは、観察や記録のための技術や方法で、さまざまなメディアの活用によって調査自体のデザインも変化してきました。たとえばビデオやオーディオによる記録によって、調査の「現場」をある程度まで復元することができます。人と人とのコミュニケーションを分析する際に、ビデオを活用することによって、会話のみならず、ちょっとした仕草や目線、身体の向きなども併せて分析できるようになりました。何度もくり返してビデオを見ることで、人と人との微細なコーディネーションについて理解を深めることができるのです。“センサーの集合体としてのケータイ”を活用した調査は、以下のような点で、これまでの調査方法、ひいてはわたしたちのもの見方・考え方を変えうるのではないかと考えられます。

(1) 調査に関わるコスト感覚の変容

まず、ケータイをはじめとするあたらしいメディアを活用することによって、調査に関わるコスト、そして調査に対する心理的な感覚が変容する可能性があります。ここで言うコストは、研究者による調査のデザイン・実施・運営に関わるコストのみならず、被調査者の心理的な負担などをもふくめたものです。デジタルメディアの“モニター機能”ともいべき特質を活用することによって、非干渉的、あるいは相互干渉的といえる調査方法のあたらしい方向性を模索することができるはずで、カメラ付きケータイを活用することによって、これまで手（目）の届かなかった、生活者の日常に接近することができるからです。

(2) プロセスとしての調査

さらに、調査に関わる時間感覚も変化する可能性があります。従来の調査は、たとえばアンケート調査（質問紙調査）の場合は、質問票の配布から回収という一連の流れが、ある決められた時間のなかでおこなわれてきました。もちろん、わたしたちが調査・研究の「しめきり」から解放されることはないと思いますが、あたらしいメディアの特質を活かすことによって、時間的な範囲を拡げた調査が可能になります。身体とともに移動するというケータイの特質を生かして、「いつでも・どこでも」データ収集が可能になれば、調査そのものの「始まり」や「終わり」を同定することが困難になります。現に、こうしたアイデアにもとづいた調査システムの開発が試みられており、逐次更新されるデータにもとづくアドホックな調査結果を、そのつど解釈していくというあたらしいスタイルが提案されています。このことは、調査そのものの目的を再定義することになるでしょう。

(3) 自発的・不可避免的なデータの蓄積

すでに述べたように、つねに携帯することが習慣となっているケータイを社会調査に用いることによって、調査自体の「終わり」（そしてある場合には「始まり」）が不明確になり、また調査に関わる金銭的・物理的・心理的なバリアーの軽減にいたるはずですが。このような状況は、被調査者による自発的なデータの収集・蓄積と密接な関係を持ちます（被調査者という言い方自体も問い直すことになるはずですが）。また、センサー技術の発展をつうじて、近い将来には、壁やまち並みに装着されたメディアとケータイとが連動することによって、いわば不可避免的にデータが収集されていく可能性もあります。当然のことながら、セキュリティやプライバシーなどさまざまな問題はありますが、わたしたちがケータイなどの機器を持ち歩くことによって、ある種のデータが自動的に収集・蓄積されていくという方向性が考えられます。

この「特別研究プロジェクト」では、上述のようなあたらしい調査法の特質とその潜在的なインパクトを考えながら、〈社会や文化を知るための方法/活動〉としてのモバイルリサーチの可能性を検討します。実際に、小諸市（長野県）でフィールド調査をおこない、ワークショップ等の運営をしながら、できるかぎり具体的な理解を試みるつもりです。

【履修条件/予定学生数】

近年、“フィールドワーク”ということばが一般的に使われるようになりましたが、“フィールドワーク”においては、地道に観察・記録をおこなうこと、時間をかけてデータの整理や解釈を試みるのが重要です。つまり、知識を生成するための“技法”としてのトレーニングには（それなりの）時間とエネルギーが必要なのです。また、さまざまなモバイルメディアを活用したあたらしい調査方法について考える、“実験するマインド”も要求されます。

2010 年度春学期の特別研究プロジェクトは、地域コミュニティにおけるフィールドワークやイベントへの参画をつうじて、モバイルリサーチの可能性について考えます。

15～20 名程度の学生数を想定しています。以下のような学生の履修を歓迎します：

- ・地域コミュニティにおける社会活動や、フィールドワークを中心的な活動に据えた学習環境のデザインに関心がある。
- ・カメラ付きケータイをはじめとするモバイルメディアを活用した、フィールド調査に興味がある。
- ・フィールドワークに時間・エネルギーを使うことができる（つもりがある）。
 - ※ ナレッジスキル科目「フィールドワーク法」をすでに履修していることが望ましい。
 - ※ 加藤が担当する「研究会」の履修者/既修者を優先的に受け入れることがある。

【募集方法】

- ・「研究会」および「フィールドワーク法」（2010年度春学期開講）講義内で告知
 - ・「研究会シラバス」（2010年度秋学期）および加藤文俊研究室ウェブにて告知
 - ・つぶやき（twitter）で告知
- * 15～20名募集し、希望者多数の場合は、上記の履修条件をふまえて選考をおこなう。

【実施期間/実施場所】

2010年7月29日（木）または30日（金）（オリエンテーション：履修者と調整）
2010年7月31日（土）～8月3日（火）（フィールドワーク/ワークショップ：長野県小諸市）
2010年9月14日（火）（まとめ/ふりかえり：履修者と調整）
2010年9月14日（火）（成果のまとめ/アウトプットの提出期限：予定）

【構成・運営方法】

今回の特別研究プロジェクトでは、方法/活動としてのモバイルリサーチについて、理論的な問題をレビューするとともに、じっさいにまちを歩き、データ収集をめぐる問題点や課題を実践的に理解することを目指します。7月31日（土）～8月3日（月）は、全員で小諸市（長野県）に出かけてフィールドワークやワークショップをおこないます。
※交通費や宿泊費等については、補助できるよう調整中です。

※ 小諸でのフィールドワークは、小諸市教育委員会等との共同企画です。そのため、フィールドワークの実施日程は、上記のとおりで確定です。

※ フィールドワークが計画されている期日は、春学期「追加試験」の日程と、一部重複しています。本プロジェクトの履修希望者（履修者）で、追試受験の必要が生じた学生は、本プロジェクトに参加することができなくなります。

スケジュール（暫定版・6/15）

1	7/29(木) (90分)	オリエンテーション① (@SFC) ● モバイルリサーチの可能性 ● 考現学の思想と方法 ● 基本的な考え方 ● スケジュールの確認
2	7/31(土) (180分+)	オリエンテーション② (@長野県小諸市) ※ 現地集合 ※ 一部の予定については、調整中
3	8/1(日) (540分+)	フィールドワーク (@長野県小諸市) モバイルリサーチの実践 ● モバイルメディアによる「こもろ・日盛俳句祭*」のドキュメンテーション * 小諸は、太平洋戦争時、あしかけ3年にわたって高濱虚子が疎開した地で、その後も虚子による稽古会が開催された。「日盛会」は、明治41年高濱虚子が、8月一か月間、毎日開いた「俳句会」で、「句会」というシステムのなかでお互いの「詩魂」をぶつけ合った。今回は、「こもろ・日盛俳句祭」というイベントを起点に、小諸のまちや人びとの暮らしについて理解し、モバイルメディアを活用したドキュメンテーションの方法と実践について考えることを主題とする。 ● コンセプトワークと編集作業
4	8/2(月) (540分+)	フィールドワーク (@長野県小諸市) モバイルリサーチの実践 ● モバイルメディアによる「こもろ・日盛俳句祭」のドキュメンテーション ● コンセプトワークと編集作業
5	8/3(火) (540分+)	フィールドワーク (@長野県小諸市) モバイルリサーチの実践 ● モバイルメディアによる「こもろ・日盛俳句祭」のドキュメンテーション ● コンセプトワークと編集作業 ※ 現地解散（行程は3日で終了・4日朝、解散） ※ 一部の予定については、調整中
5	9/14(火) (180分+)	まとめ/ふりかえり (@SFC) ● ディブリーフィング ● フィールドワークをまとめる（文化を書く） ● 成果の公開と第三者に向けたデザインについて ● 今後の課題について

* フィールドワークの成果（最終課題）は9月14日（火）まで（予定）に提出する。2010年度秋学期に履修登録し、2単位を申請することができる。